

付篇2

吉田遺跡第Ⅳ地区の調査

横山 成己

1. 報告の経緯

山口市の中心街、現在の県道203号厳島早間田線(通称「パークロード」)沿いを中心に各地に散在していた学部が、山口市吉田地区への統合移転を開始するのは、昭和41年(1966)のことである。校地造成中に土器等の埋蔵文化財が多量に掘り出されたことを受け、7月より小野忠熙氏(当時:教育学部教授)が学生らと緊急発掘調査を実施するとともに、構内の分布調査やボーリング調査を実施することによって、遺跡の広がりや性格把握に努めつつ、開発工事に直接関係する敷地の緊急対応を順次行った。翌昭和42年(1967)7月には、本学のみならず外部の学術研究者と事務局の協力を得て、学長を団長とする「山口大学吉田遺跡調査団(以下、調査団と記す)」が結成され、以降統合移転がひとまずの終了を迎える昭和48年(1973)まで開発に伴う埋蔵文化財保護対応を行うこととなった。

これらの調査成果は、小野氏により昭和51年(1976)に『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』として公開された(小野1976)が、これはわずか13頁の略報であり、昭和52年(1977)の当館竣工後は、出土遺物や記録類がほぼ未整理のまま長らく収蔵されることとなった。

平成4年(1992)以降、小野氏または調査団に関する資料に対し、館員による資料整理や調査報告、追加調査が断続的に行われてきた(豆谷1993ab・1994・1995、横山2007、田畑2016・2017a)ものの、未整理の資料が未だ多数存在している。

平成31・令和元年度(2019)に至り、農学部附属農場溜池2・3・4の改修及び撤去という大規模工事が計画されたことから、事前に周囲の埋蔵文化財の様相を把握する必要があることを受け、昭和41年(1966)に小野氏と学生により実施された吉田遺跡第Ⅳ地区、農学部附属農場牛舎新営に伴う発掘調査にて出土した資料の調査を実施し、その成果を報告することにした。

2. 吉田第Ⅳ地区の調査

まず、『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』における小野氏の記述を確認する。

第Ⅳ地区

第Ⅰ地区の北東の谷奥にある傾斜変換線付近で、調査当時牛舎の予定地とされた畑地であった。発掘調査の結果、弥生時代と古墳時代の後期から中世をへて大学移転直前の住居跡などがあり、4回にわたってほぼ同じ場所に間欠的に居住していたことが明らかになった。

弥生時代の遺構は、1個の土壇と著しく削剥された直線状の溝状遺構がある。古墳時代の後期には土師器と須恵器を出土した方形プランの竪穴住居跡が2軒以上あるが、何れも水田化の際切り下げられて損壊が大きい。この期の住居跡の一つには炉跡近くに置かれた平たい自然石に夥しい切痕があり、工作台か調理台に使われたものと思われる。中世の住居跡や環状の溝の遺構も損壊を蒙っていた。住居跡は極く浅い方形プランの竪穴で、内部から瓦器が出土した。遺物の種類や量は少なく、少量の弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などがあるが、一部の古墳時代後期の土器を除いてはいずれも小破片である。(小野1976:10頁)

当館に収蔵される吉田第Ⅳ地区に関連する資料は、遺物収納コンテナ1箱にまとめられた出土遺物と、「吉田第Ⅳ遺跡 1966年10月18日～30日 実測者 佐藤 添田 田中 須内 武居 埴田」の注記がある平板測量図1枚(縮尺不明)、平面図類(原図の大部分は所在不明でトレースと青焼きが残る:縮尺

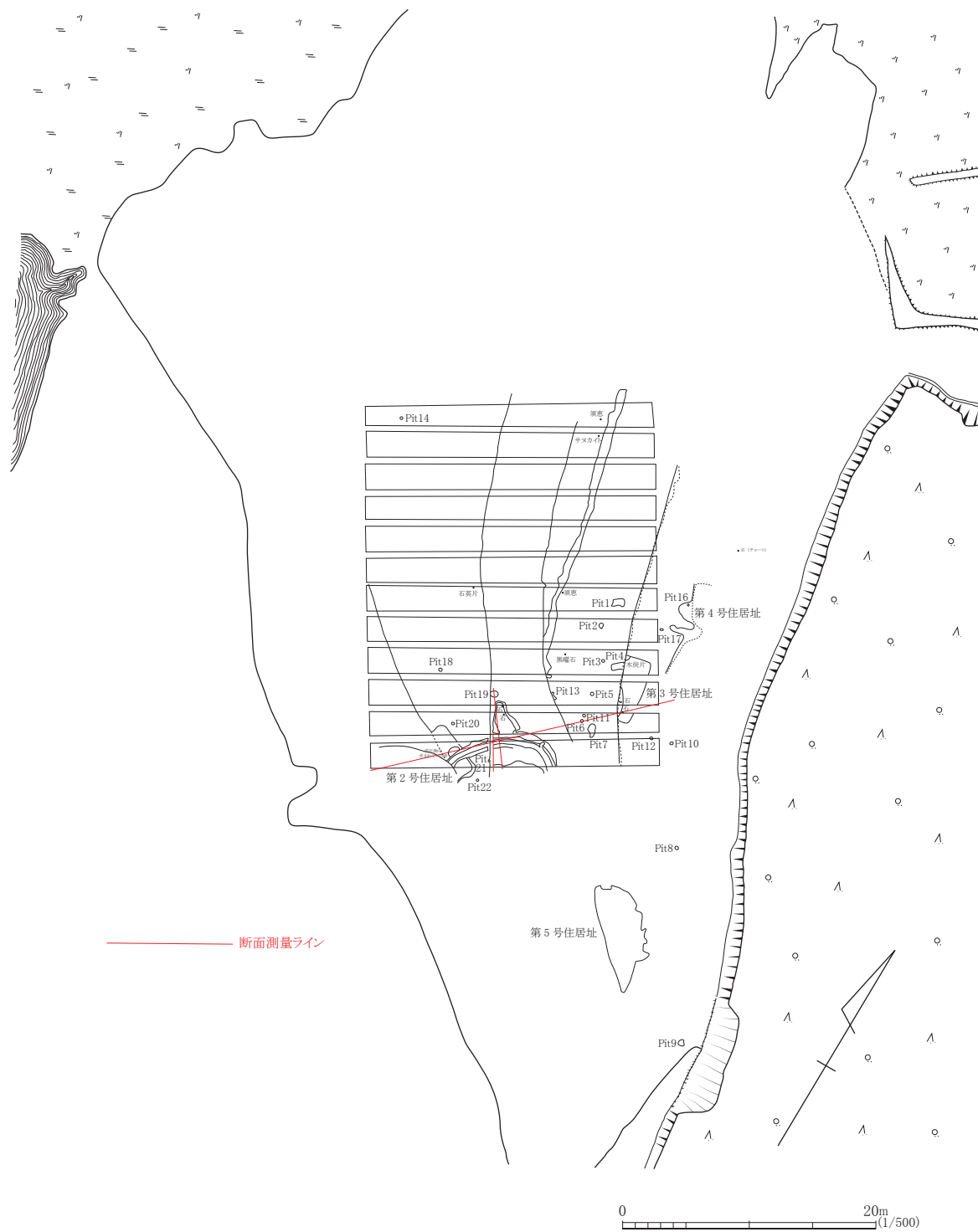


図 79 吉田遺跡第IV地区（農学部附属農場牛舎敷地）平板測量図

1/10)、断面図3枚(「S41.10.29 吉田第Ⅳ遺跡 A面の第3トレンチ断面図 縮尺1/5 岡村 辻田」、「平川第Ⅳ C面溝状遺構断面図 第2号住居址断面図」、「平川吉田第Ⅳ遺跡 1966.11.2 縮尺1/10 実測者、永富 添田 嶋崎 断面図X-Y」の注記がそれぞれある)、調査写真94葉である。

測量図や遺物収納袋に記された日付から、第Ⅳ地区の調査は昭和41年(1966)の10月14日から11月2日にかけて実施されたようであるが(写真203～209)、同年10月15日から10月30日にかけては第Ⅰ地区B区でも調査が実施されており(豆谷1993b)、11月2日には第Ⅱ地区第1調査区の本発掘調査が開始され、12月後半まで調査を実施していることから(横山2007)、小野氏の指導の下、学生達が充実した学業生活を送っていた姿が浮かび上がる。

第Ⅳ地区での発掘調査は、農学部附属農場牛舎予定地を対象として実施された。残された平板測量図^{註3}には、北東-南西方向の12本のトレンチ(南西から第1～12トレンチと命名)と遺構のほか、針葉樹や広葉樹の地図記号とともに溜池の北東端部とみられるコンタラインや周辺地形が描かれている(図79)。正確な調査区の位置は特定できないものの、現在の地図と重ね合わせてみると、おおよそ現牛舎建物をおおう範囲で調査が行われたものと推定される(図80)。

a. 遺構(図81、写真211～242)

本学統合移転以前の当地は、東から西に降下する丘陵端部を階段耕作地として活用していたようで、地山は大きく削平を受けており、調査においては高所平坦面から低所平坦面までをA～E面と呼称している。削平のため遺構の依存状態は悪かったようであるが、竪穴式住居跡4棟、溝2条、土壇1基、ピット22基が検出されている。

竪穴式住居跡

遺構平面図および平板測量図によると、第2号～第5号の4棟が検出されている。遺物収納袋に「第1住居址」と記されたものが存在するが、内容的に第3号竪穴住居跡出土資料とみなされることから、何らかの理由により第1号は欠番となったのだろう。また、平板測量図(図79)と遺構平面図(図81)に描かれた第4・5号住居跡は、ピット4基とともに調査トレンチ外に位置していることから、調査時に地表に露出していたものと思われる。

第2号竪穴式住居跡は、調査区の南東部、低位平坦面であるD面にて検出された方形住居跡である

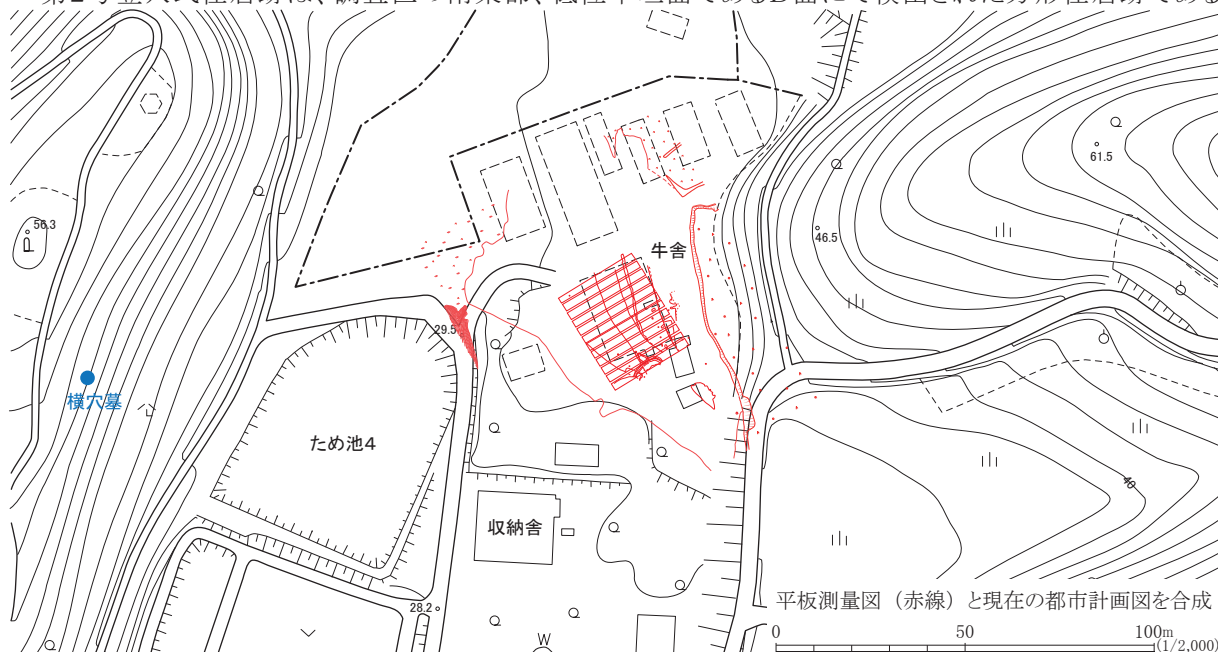


図80 吉田遺跡第Ⅳ地区(農学部附属農場牛舎敷地) 調査区位置図

(写真215～218)。主軸を南東－北西方向に向けており、階段耕作により南西半部が破壊されている。遺存部の中央南西寄り溝2と重複しているが、図や写真を見ると溝2により住居跡が切られていると判断したようである。遺存する北東壁は長さ440cmを計る。残存深度に関しては不明確であるものの、残された断面図C－Dを見ると10cm程度であったと思われる。床面遺存部中央には、溝2に切られる状態で残存長70cm、幅80cmの楕円形土壌が存在する。平板測量図には「炭化物の含まれている所」との注記が付されており、断面図E－Fから深さは5cm程度とみられることから、地床炉の可能性が残る。当住居跡に関しては、小野氏は瓦器の出土を根拠に「中世の住居跡」と見なしているが、残された資料中に第2号竪穴式住居跡出土と目される遺物が見いだせない(表18)ことから、所属時期の特定は困難である。

第3号竪穴式住居跡は、高位平坦面であるA面にて検出された方形住居跡である(写真219～223)。主軸をほぼ南北に向けており、階段耕作により西半部が破壊されている。遺存する東壁は長さ510cmを計る。上位は大きく削平を受けており、断面図X－Yでの残存深度は20cmである。遺物台帳NO. 11の注記に「1966.10.22平川吉田Ⅳ③トレンチA面攪乱層」と注記されていること、10月29日に記録された断面図G－Hでは「包含層」と認識されていること、翌30日から「1号住居址」と記された遺物袋が登場することから、調査の最終盤で住居跡と認識されたものと想像される。小野氏が記した「炉跡近くに置かれた平たい自然石」は床面の南側に図示されているが、炉跡は図示されていない。一方で北壁付近に「木炭片」が図示されており、遺物台帳NO. 13と遺物台帳NO. 23に収納された炭化物がこれに当たるとと思われる。柱穴は図示されていないものの、調査写真(写真219・223)からは複数存在しているように見える。当住居跡出土資料は、所属の可能性が高いものを含めると比較的豊富で、小野氏は古墳時代後期としているが、奈良時代(8世紀代)の住居とみなされる。

第4号竪穴式住居跡は、第4～7トレンチの北東外方に位置する。写真219の右端に写るのが第4号竪穴式住居跡と見られるが、複数の遺構の切り合いにも見え判然としない。平面図では、方形住居の西壁と思われるラインが描かれており、残長約750cmを測る。

第5号住居跡は、平板測量図にのみ描かれており、それと分かる写真は残されていない。第1トレンチの10m南東に位置し、南西半部は削平を受けているようで、平面形態は判然としない。残存長約900cm、残存幅約350cmを測り、住居であれば大型のものとなる。

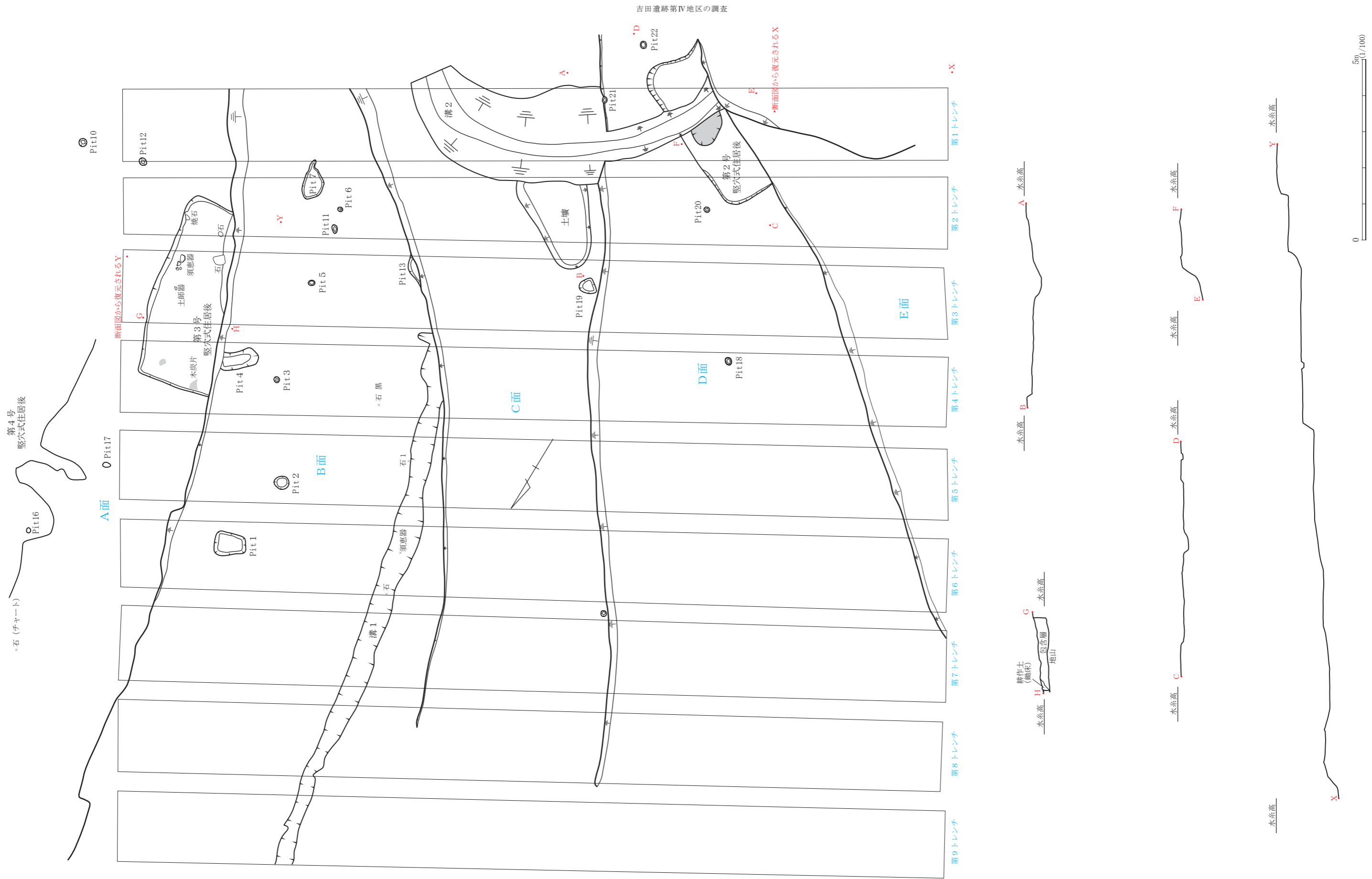
溝

溝1はB面を南北方向に直線的に走っている。幅30～80cmを測り、約15mの長さで検出されている。断面図が残されておらず深度は不明であるが、C面に遺存していないことから20cm未満と推定される。小野氏は「著しく削剥された直線状の溝状遺構」を弥生時代のものとしているが、出土遺物に弥生時代のものはみられない。

溝2はC面とD面の南端部で検出されており、南東から南西にC字状に走る。溝幅は最大で260cmを測るが、D面では上部を削平され80cm程度に狭まる。断面図A－Bにより深さは約20cmと見られるものの、写真239～242ではもう少し深いようにみえる。青磁や滑石製石鍋が出土していることから、中世に機能した溝と推定される。

土壌

C面溝2の北に接している。図・写真では両者の先後関係は不明であり、溝2の関連施設である可能性も残している。残存長240cm、最大幅200cmを測り、断面図A－Bにより深さは約15cmとみられる。当遺構は小野氏報告に触れられておらず、明確な出土遺物も存在しないが、コンテナNO. 95袋NO. 3の「C面遺構」が土壌を指すのであれば、古代に所属する遺構となる。



第81図 吉田遺跡第IV地区(農学部附属農場牛舎敷地)遺構平面図・断面図



写真 203 調査地遠景（南西から）



写真 204 調査地遠景（南西から）



写真 205 調査地から農場本館を望む（北東から）



写真 206 調査風景（南西から）



写真 207 調査風景（北東から）



写真 208 調査風景（南西から）



写真 209 調査風景（南西から）



写真 210 完成直後の農場本館（南東から）



写真 211 A面B面遺構群 (南東から)



写真 212 B面遺構群 (北から)

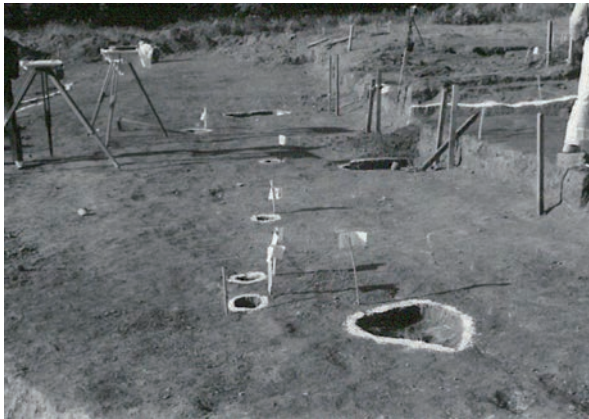


写真 213 B面遺構群 (南東から)



写真 214 D面遺構群 (北東から)



写真 215 第2号竪穴式住居跡 (南東から)



写真 216 第2号竪穴式住居跡 (西から)



写真 217 第2号竪穴式住居跡 (西から)



写真 218 第2号竪穴式住居跡 (南東から)

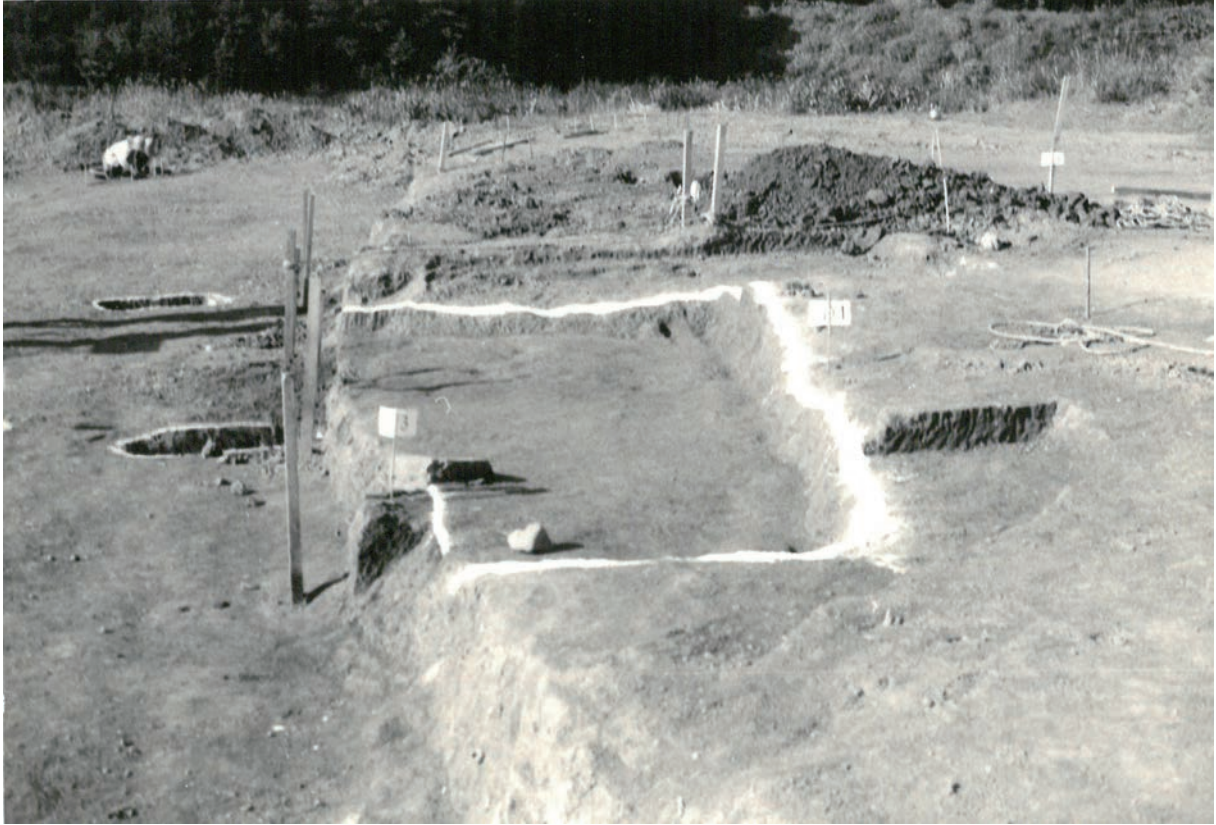


写真 219 第3号竪穴式住居跡（南から）



写真 220 第3号竪穴式住居跡須恵器出土状況（西から）



写真 221 第3号竪穴式住居跡石器出土状況（方向不明）



写真 222 第3号竪穴式住居跡（北から）



写真 223 第3号竪穴式住居跡（南から）

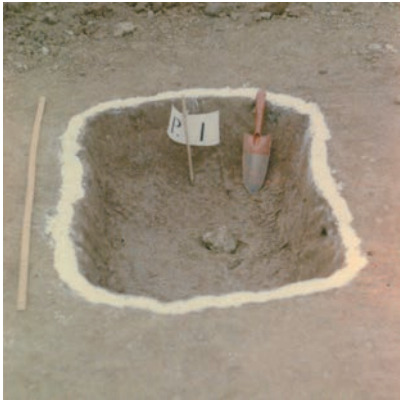


写真 224 Pit1 (南西から)

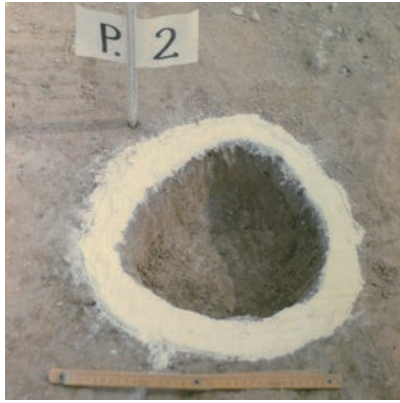


写真 225 Pit2 (南西から)



写真 226 Pit3・4 (南西から)



写真 227 B面Pit群 (南から)



写真 228 Pit6・11 (南西から)



写真 229 Pit7 (南東から)

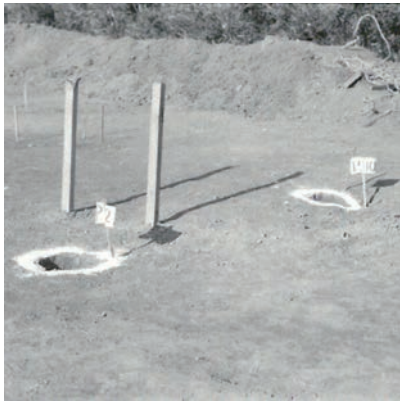


写真 230 Pit10・12 (南西から)



写真 231 Pit13 (南西から)

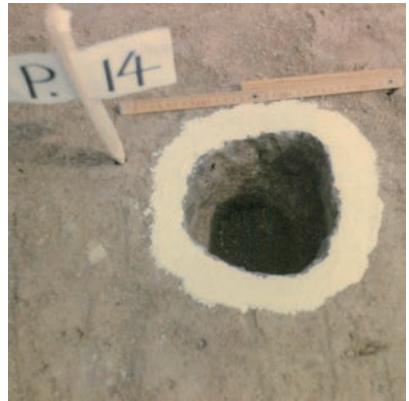


写真 232 Pit14 (方向不明)

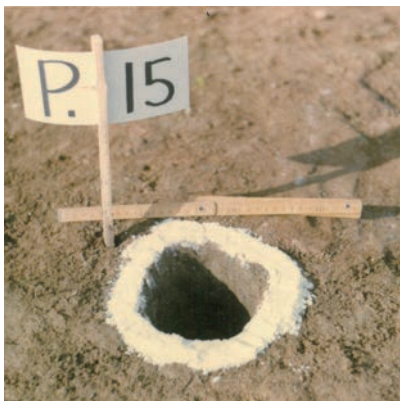


写真 233 Pit15 (所在不明)



写真 234 Pit18 (南西から)



写真 235 Pit19 (西から)



写真 236 Pit20 (方向不明)

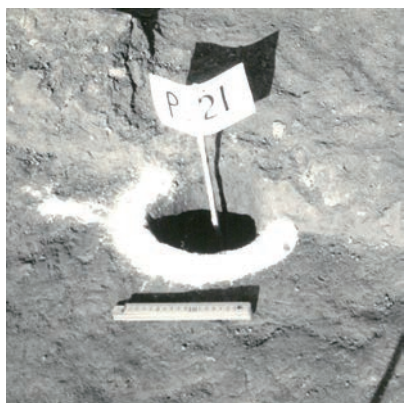


写真 237 Pit21 (南西から)

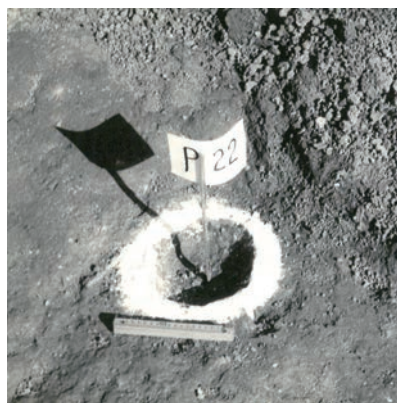


写真 238 Pit22 (方向不明)



写真 239 溝2 (北東から)



写真 240 溝2 (南東から)

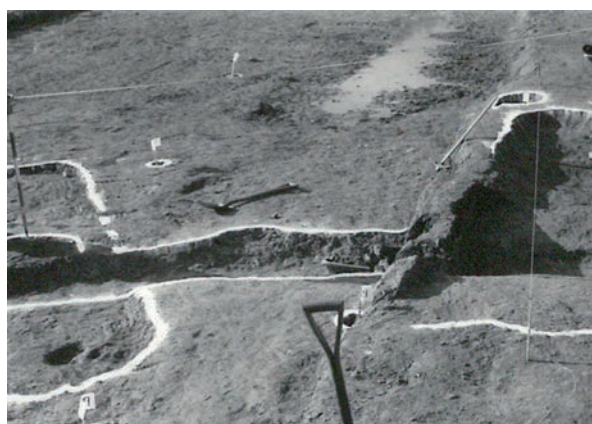


写真 241 溝2 (南東から)



写真 242 溝2 (北から)

b. 遺物(図82～84、写真243・244、表18～20)

当館に伝わる吉田遺跡第IV地区出土遺物を表18にまとめた。内容をみてわかるように、遺物はごく少量であり、図示可能な資料も少ない。また、出土遺構を特定できる遺物も少なく、ここでは可能性が高いものも含めて提示する。

第3号竪穴式住居跡

10月30日の遺物取り上げ時には「第1住居址」と呼称されていたようだが、平面図に第1号住居なるものは存在せず、遺物の内容的から第3号竪穴式住居跡出土と判断した。1は須恵器甕の外反口縁に形態が似るものの、3箇所に長方形透窓の痕跡が存在することから、円面硯脚部とみられる。透窓の横幅は約1cmであり、間隔は一定しない。吉田遺跡で5例目の円面硯となる(河村ほか1985、田畑2004、田畑

2017b・本書図18の79、横山2020)。2は土師器甕口縁部片。やや内傾して立ち上がる頸部から口縁をわずかに外反させる。27・28は図81や写真219から出土状況がわかる資料で、小野氏報告の「炉跡近くに置かれた平たい自然石」である。27の両面には擦痕がみられ、両者ともに被熱により赤色化している。3～8はいずれも須恵器で、第3号竪穴式住居跡出土の可能性が高い。3は坏蓋口縁部片、4・5は坏口縁部片、6は高坏口縁部とみられる。7は皿口縁部片、8はカキ目の復元径(20.5cm程度)から横瓶体部と推定した。破断面の一端に弧状に横ナデが施されており、内面もわずかに外反することから頸基部で折損しているものと思われる。

溝1

小野氏が「弥生時代の遺構」としたものであるが、弥生土器は確認されていない。9は須恵器坏身の受け部片。受け部および口縁端部を欠失する。10は瓦質土器鍋の口縁部片とみられる。

溝2

小野氏が「中世の環状の溝」としたもので、11は龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁椀口縁部片である。29は滑石製石鍋の体部片。外面に煤が付着している。

溝1または溝2

遺物袋に「溝状遺構」としか記されていない資料で、溝1・2いずれかより出土したものとみられる。12は須恵器坏の口縁部片で、直立気味に高く立ち上がる口縁の内端に段を形成している。13は須恵器高台付坏底部片で、高台は欠失しているものの底部外端のやや内側に付く。14は瓦質土器の体部片。外面に格子叩きが施されている。

溝2または土壌

遺物袋に「C面遺構」とあるので、溝2または土壌から出土したとみられる。15は須恵器高台付坏底部片で、断面長方形の高台が底部外端に付く。16も須恵器高台付坏底部片で、内外端部をつまみ出した高台は、体部外端のやや内側に付く。17は土師器高台付坏底部片。底部外端に断面三角形の小ぶりの高台が付く。

E面(攪乱)

遺構平面図(図81)をみると、E面北東端部(第1トレンチ)は大きく攪乱を受けているようである。遺物は攪乱埋土から出土したものとみられる。18は須恵器坏蓋口縁部片。扁平な天井部から口縁をほぼ垂直に下垂させる。19は土師器坏底部片。平底の底部から体部が直立気味に立ち上がる。20は瓦質土器播鉢の体部片。6条の卸目が残る。21は瓦質土器鍋の体部片。外面に格子叩きが施されている。22は瓦質土器足鍋の脚部片。

表土・包含層そのほか

23は須恵器高台付坏の底一体部片。底部外端に外方に大きく開く長い高台が付く。体部外面には吉田遺跡にて散見される鳥足状のヘラ記号が施されている。24は須恵器坏の口縁部片。口縁内端に面を取っている。25は瓦質土器羽釜の口縁部片。鏝はやや上向きに付き、端部を欠失している。30は安山岩製の有茎尖頭器と見られる。遺物袋に「第5トレンチB面」と記されており、平面図にある「×石1」のマークが出土位置と思われる。31は輝緑岩製の磨製石斧の刃部片で、全面風化が著しいが、破断面を砥石として再利用している。遺物袋に「第Ⅱトレンチ」とあり、平板測量図を見ると第2トレンチ土壌内に「石」と記されていることから、土壌埋土より出土した可能性がある。32は黒曜石製の打製石鏃。逆刺の一部が欠失している。吉田遺跡第Ⅳ地区から出土した以外の情報を有していない。26は混入品で、動物医療センター周辺(吉田遺跡第Ⅱ地区)にて採取された完形復元可能な須恵器高台付坏である。

吉田遺跡第Ⅳ地区の調査

表18 吉田遺跡第Ⅳ地区出土遺物一覧

NO.	旧コンテナ 袋番号	袋注記	内容	今回注記	掲載遺物	備考
1	95-14	1964.10.14 吉田第4遺跡 表土及包含層	須恵器2 瓦質土器1	YD1966-IV No.1	NO.23 NO.25	
2	95-30	1964.10.29 溝状遺構 D面 第4遺跡	須恵器2 土師器2	YD1966-IV No.2		溝2出土遺物
3	108-28	1966.7.10 吉田遺跡 第Ⅳ遺跡 第Ⅱトレンチ	石器1	YD1966-IV No.3	NO.31	
4	95-10	1966.9.8 吉田第Ⅳ遺跡	石器2	YD1966-IV No.4	NO.32	
5	95-13	1966.10.21 吉田遺跡Ⅳ 第Ⅱトレンチ 表土	須恵器1 土師器1	YD1966-IV No.5	NO.24	
6	95-27	1966.10.21 吉田遺跡Ⅳ A面 第Ⅱトレンチ1 吉田第Ⅳ遺跡	土師器14	YD1966-IV No.6		第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
7	95-15	1966.10.22 P.15	石1	YD1966-IV No.7		Pit15出土遺物
8	95-17	1966.10.22 吉田遺跡ⅣA 第Ⅱトレンチ2	須恵器2 土師器5	YD1966-IV No.8	NO.4 NO.8	第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
9	95-19	1966.10/22 平川第Ⅳ遺跡 3トレンチ	黒曜石1	YD1966-IV No.9		
10	95-22	1966.10/22 平川第Ⅳ	土師器1 炭化物	YD1966-IV No.10		
11	95-24	1966.10.22 平川吉田Ⅳ ③トレンチ A面 攪乱層	須恵器2 瓦質土器1 土師器13	YD1966-IV No.11	NO.7	第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
12	95-16	1966.10.22 第4遺跡 第4トレンチ	須恵器1 土師器5	YD1966-IV No.12	NO.5	第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
13	95-12	S41.10.22 吉田第四 第4トレンチ	炭化物	YD1966-IV No.13		第3号竪穴式住居跡出土資料 である可能性が高い
14	95-18	S41.10.22 吉田第四 S1 5トレンチ B段	石器1	YD1966-IV No.14	NO.30	
15	95-8	1966.10.22 吉田第Ⅳ遺跡 第6トレンチ B段	黒曜石1	YD1966-IV No.15		
16	95-7	1966.10.24 平川吉田第Ⅳ遺跡 a面 第3トレンチ	須恵器1 土師器1	YD1966-IV No.16		第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
17	95-31	1966.10.24 吉田遺跡Ⅳ 第3トレンチ ●判読不能	土師器2	YD1966-IV No.17		
18	95-9	1966.10.24 平川四遺跡 第7トレンチ	土師器3	YD1966-IV No.18		
19	無	1966.10.25 吉田第4遺跡 a面 Ⅱトレンチ	土師器2	YD1966-IV No.19		第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
20	95-3	1966.10.27 吉田第Ⅳ遺跡 C面遺構	須恵器2 土師器1 石英1	YD1966-IV No.20	NO.15 NO.16 NO.17	溝2または土壇出土遺物 である可能性が高い
21	95-5	1966.10/29 吉田第Ⅳ遺跡 C面上 溝状遺構	青磁1 石鏝1	YD1966-IV No.21	NO.11 NO.29	溝2出土遺物
22	95-4	平川・吉田第Ⅳ遺跡 第1住居址 1966.10.30	須恵器4 土師器9 粘土塊1	YD1966-IV No.22	NO.1 NO.2	第3号竪穴式住居跡出土遺物
23	無	平川・吉田第Ⅳ遺跡 第1住居址 1966.10.30	炭化物	YD1966-IV No.23		第3号竪穴式住居跡出土資料
24	95-25	1966.10/30 吉田第Ⅳ遺跡 B面の溝状遺構	須恵器4 土師器16 瓦質土器1	YD1966-IV No.24	NO.9 NO.10	溝1出土遺物
25	95-11	吉田遺跡第Ⅳ遺跡 S41.10.30 溝状遺跡	須恵器7	YD1966-IV No.25	NO.12 NO.13 NO.14	溝1・溝2のどちらか不明
26	95-23	吉田(Ⅳ) A3 Trench	須恵器4 土師器16	YD1966-IV No.26	NO.3 NO.6	第3号竪穴式住居跡出土遺物 である可能性が高い
27	95-20	●●(判読不能) D面 南側	土師器2	YD1966-IV No.27		
28	95-28	1966.10.28 吉田第Ⅳ遺跡 E面	須恵器5 土師器3 瓦質土器4	YD1966-IV No.28	NO.18 NO.19 NO.20 NO.21	
29	95-26	Ⅳ E攪乱	瓦質土器1	YD1966-IV No.29	NO.22	
30	95-21	第四遺跡 第四トレンチ かくむん層	土師器6	YD1966-IV No.30		
31	95-6	吉田 Ⅳ遺跡 カクラン層 チップ	石2	YD1966-IV No.31		
32	12-1	吉田遺跡第Ⅳトレンチ 包含層中 1966.7.18	弥生土器および土師器73	YD1966-IV No.32		吉田遺跡第Ⅰ地区A区 第Ⅳトレンチ出土遺物と 見られる
33	95-1	吉田第一Ⅳ 家畜病院横 S42.5.25	須恵器3 土師器1 磁器1	YD1966-IV No.33	NO.26	吉田遺跡第Ⅱ地区 (動物医療センター周辺) にて採取されたと思われる
34		遺物に「牛舎」の注記	台石(珪か自然石など)	YD1966-IV No.34	NO.27 NO.28	平成10年(1998)4月15日に附属 農場本館で発見され、埋蔵文化財 資料館に移管された資料 第3号竪穴式住居跡出土遺物

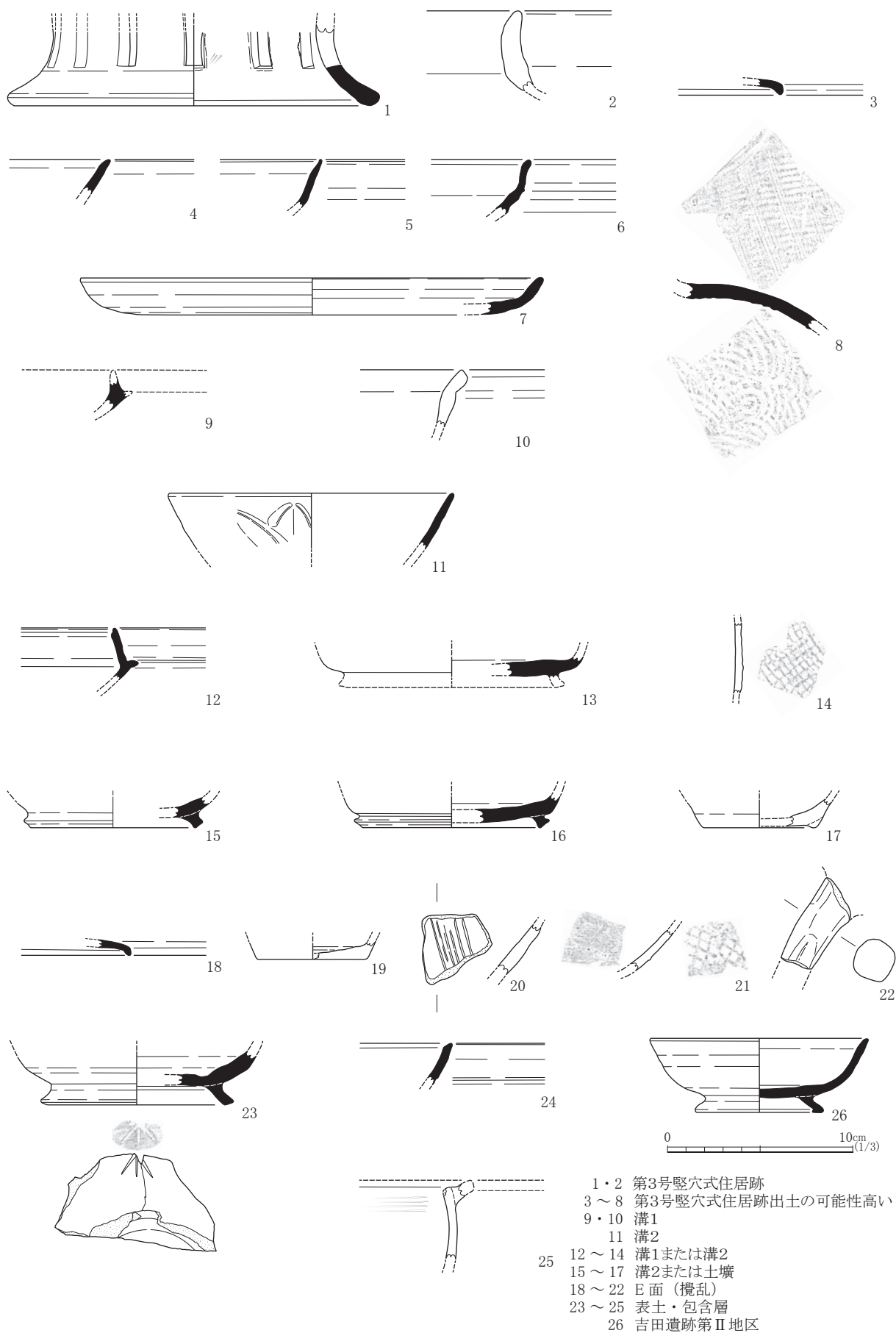


図 82 吉田遺跡第IV地区出土土器実測図

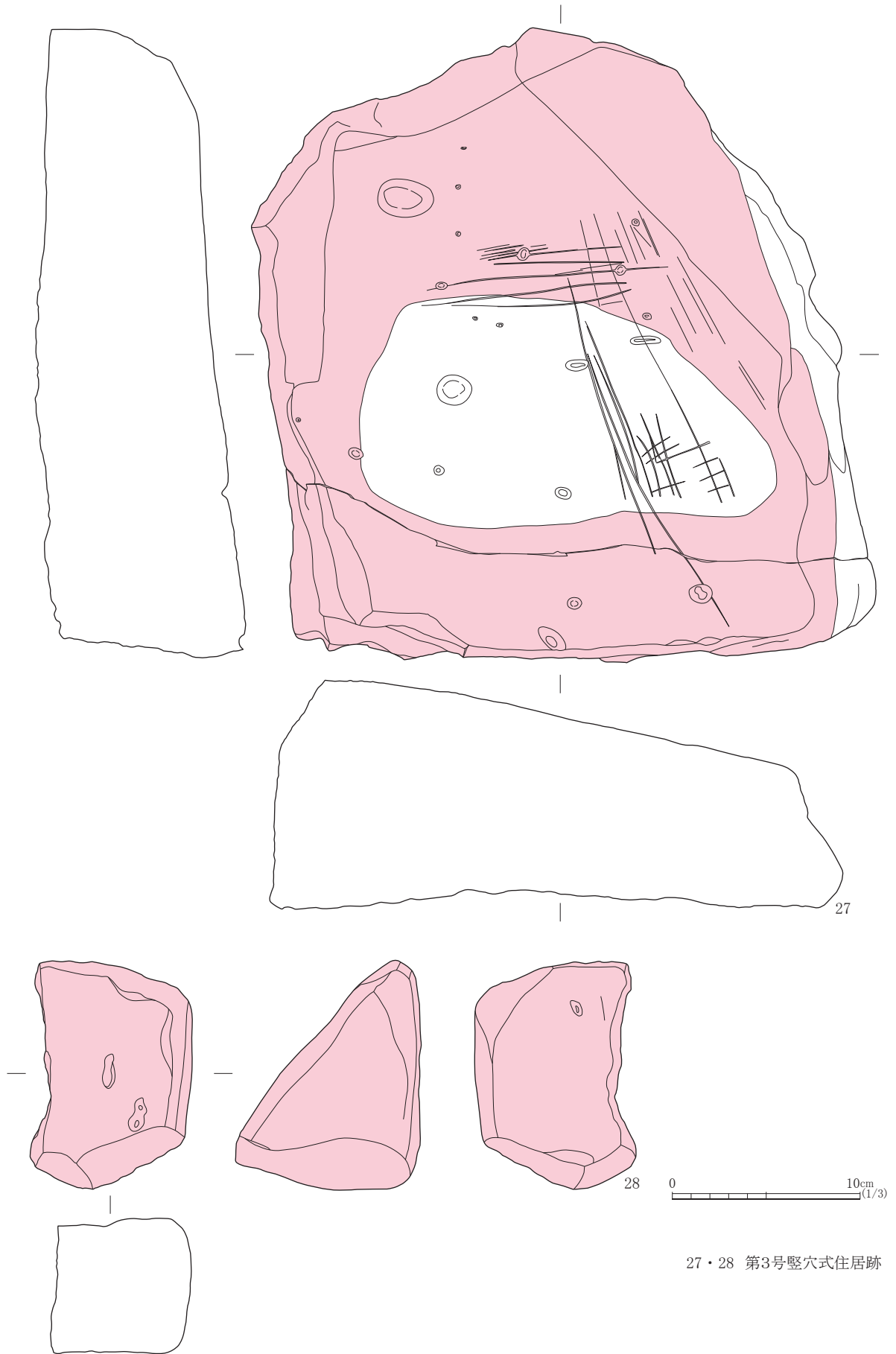


図 83 吉田遺跡第IV地区出土石器実測図①

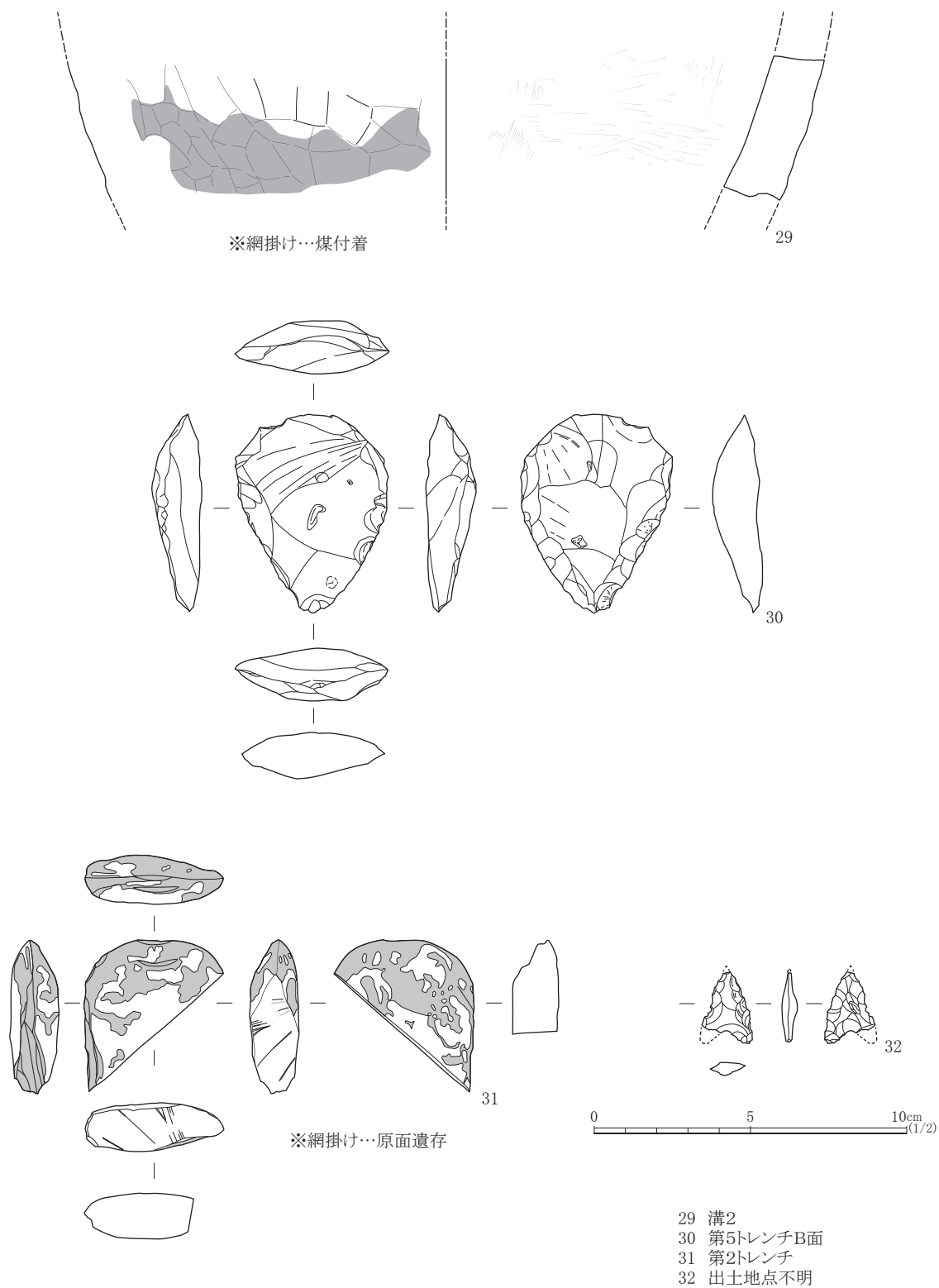


図 84 吉田遺跡第IV地区出土石器実測図②



- 1・2 第3号竪穴式住居跡
- 3～8 第3号竪穴式住居跡出土の可能性高い
- 9・10 溝1
- 11 溝2
- 12～14 溝1または溝2
- 15～17 溝2または土壌
- 18～22 E面(攪乱)
- 23～25 表土・包含層
- 26 吉田遺跡第II地区

写真 243 出土遺物 (土器)



27



28

27・28 第3号竪穴式住居跡



29-1



29-2

29 溝2



30-1



31-1



32-1



30-2



31-2



32-2

30 第5トレンチB面
31 第2トレンチ
32 出土地点不明

写真 244 出土遺物 (石器)

表19 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面		
1	第3号 竪穴式 住居跡	須恵器 円面硯	脚部	脚部径(20.2)	①② 灰色(N6/)	0.2~1.5mm φ の砂粒少量 混ざる	スカシ間隔 不均一
2	第3号 竪穴式 住居跡	土師器 甕	口縁部	③残高4.3	①②橙色(7.5YR7/6)	0.1~1.5mm φ の砂粒少量 混ざる	
3	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 坏蓋	口縁部	③残高0.95	①②灰白色(N7/)	0.1~0.2mm φ の砂粒 極少量混ざる	
4	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 坏	口縁部	③残高1.9	①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.2~0.5mm φ の砂粒 極少量混ざる	小片のため 傾き不確実
5	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 坏	口縁部	③残高2.7	①②灰色(N6/)	0.2~0.5mm φ の砂粒 極少量混ざる	高坏口縁部 の可能性 あり
6	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 高坏	口縁部	③残高2.9	①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	0.1~0.5mm φ の砂粒少量 混ざる	
7	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 皿	口縁~ 底部	①(25.0) ②(19.0) ③2.0	①②灰白色(N7/)	0.2~1mm φ の砂粒少量 混ざる	
8	第3号 竪穴式 住居跡か	須恵器 横瓶	肩部		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	0.5~2mm φ の砂粒少量 混ざる	
9	溝1	須恵器 坏	受け部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	0.2~0.5mm φ の砂粒 極少量混ざる	
10	溝1	瓦質土器 鍋か	口縁部	③残高3.1	①暗灰色(N3/) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.2~0.5mm φ の砂粒少量 混ざる	焼成やや 不良
11	溝2	青磁 椀	口縁 ~体部	①(15.4) ③残高3.0	素地 灰色(N6/) 釉 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	精緻	龍泉窯系
12	溝1または 溝2	須恵器 坏	口縁 ~受け部	③残高2.8	①②灰白色(7.5Y7/1)	0.1~1mm φ の砂粒 極少量混ざる	
13	溝1または 溝2	須恵器 高台付坏	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	0.1~1mm φ の砂粒少量 混ざる	高台欠失
14	溝1または 溝2	瓦質土器 鍋か	体部		①灰色(N5/) ②灰白色(7.5Y7/1)	0.1~0.2mm φ の砂粒 極少量混ざる	
15	溝2または 土壇	須恵器 高台付坏	底部	②高台径(9.7) ③残高1.65	①②灰白色(7.5Y7/1)	0.2~0.5mm φ の砂粒 極少量混ざる	
16	溝2または 土壇	須恵器 高台付坏	底部	②高台径(10.6) ③残高1.7	①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	0.2~1.5mm φ の砂粒少量 混ざる	
17	溝2または 土壇	土師器 高台付坏	底部	②高台径(6.0) ③残高1.5	①灰白色(10YR8/2) ②褐灰色(10YR5/1)	0.2~1.5mm φ の砂粒(金雲 母など)極少量混ざる	焼成やや 不良
18	E面 (攪乱)	須恵器 坏蓋	口縁部	③残高1.3	①灰白色(N7/) ②灰白色(N7/) ~ 灰色(N5/)	0.2~1mm φ の砂粒少量 混ざる	
19	E面 (攪乱)	土師器 坏	底部	②(5.9) ③残高0.9	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②褐灰色(10YR6/4)	0.1~0.2mm φ の砂粒少量 混ざる	
20	E面 (攪乱)	瓦質土器 播鉢	体部		①暗灰色(N3/) ②灰白色(2.5Y8/2)	0.1~0.5mm φ の砂粒少量 混ざる	卸目6条
21	E面 (攪乱)	瓦質土器 鍋か	体部		①黒色(7.5Y2/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.2~2mm φ の砂粒 極少量混ざる	
22	E面 (攪乱)	瓦質土器 足鍋	脚部		①赤橙色(10R6/6)	0.2~2mm φ の砂粒少量 混ざる	二次被熱
23	表土 包含層	須恵器 高台付坏	体部 ~底部	②高台径(10.4) ③残高2.9	①灰色(N6/) ②灰白色(N7/) ~ 灰色(N6/)	0.5mm φ の砂粒極少量 混ざる	鳥足状 へラ記号
24	表土 包含層	須恵器 坏	口縁部	③残高2.3	①②灰色(5Y6/1)	0.2~0.5mm φ の砂粒 極少量混ざる	
25	表土 包含層	瓦質土器 羽釜	口縁部		①褐灰色(10YR4/1) ②褐灰色(10YR6/1)	0.2~1mm φ の砂粒 極少量混ざる	
26	吉田遺跡 第Ⅱ地区	須恵器 高台付坏	口縁 ~底部	①(11.8) ②高台径(7.0) ③4.0	①灰白色(N8/) ②灰白色(N7/)	0.2~3mm φ の砂粒少量 混ざる	

表20 出土遺物(石器)観察表

法量()は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	法量(cm)	石材	備考
			①長さ②幅③厚④重量(g)		
27	第3号竪穴式住居跡	作業台	①(33.4) ②(33.8) ③(12.2) ④(18,800)	斜長斑岩	被熱
28	第3号竪穴式住居跡	作業台	①(12.15) ②(8.8) ③(9.8) ④(1,119.2)	斜長斑岩	被熱
29	溝2	石鍋	体部径23.0 ④(185.6)	滑石	煤付着
30	第5トレンチB面	有茎尖頭器	①6.35 ②4.75 ③1.7 ④40.26	安山岩	
31	第2トレンチ	磨製石斧	①(4.8) ②(4.45) ③(1.45) ④(33.29)	輝緑岩	刃部
32	不明	打製石鏃	①(2.25) ②(0.5) ③(1.6) ④(0.91)	黒曜石	

3. 小結

吉田遺跡第Ⅳ地区は、本学吉田地区統合移転時に、構内北東部、姫山(標高199m)の南に派生する二筋の丘陵と開析谷に付された名称であり、農学部移転関連工事に際し、地区内で唯一実施されたのが附属農場牛舎新営に伴う発掘調査であった。^{註5}

調査地は、元来は東から西に舌状に延びる丘陵の西斜面であったが、本学移転以前に階段耕作地として利用されていたことから大きく削平を受けており、深度の深い遺構以外はすでに消滅したものと推測される。そのような状況において、4棟の竪穴住居跡を確認したことは大きな成果と言える。

このうち第4・5号住居跡はすでに地表に露出していたようで、新営牛舎の範囲外であったことから調査は遺構の検出にとどまったようである。小野氏が古墳時代の住居跡と判断した第3号竪穴式住居跡は、半壊状態であったものの、少量ながら遺物が出土している。内容を見る限り8世紀以降の住居跡である。第2号竪穴式住居跡に関しては、小野氏は出土遺物を根拠に中世の住居跡としているが、明確な出土遺物を確認することができなかった。

そのほかに検出された遺構に関しては、溝1は所属時期不明、溝2は鎌倉時代(13世紀ころ)に機能していた可能性が高く、溝2に接する土壌は溝2に切られているのであれば鎌倉時代以前の遺構である可能性があるが、所属時期を特定できない。ピットに関しても、建物を復元できるような並びを見せておらず、出土遺物にも恵まれていない。

当地における人類活動は、出土遺物から見ると、出土地が正しければ有茎尖頭器の出土から後期旧石器時代まで遡るようであり、縄文時代石斧の存在から周辺地での活動が断続的に行われたようであるが、集落地としての土地利用は8世紀以降に始まる。^{註7}吉田遺跡においては、当地のおよそ850m南方、動物医療センター周域に官衙が成立する時期であり、円面硯の出土や、鳥足状ヘラ記号を施す須恵器の共有から、官衙に関連する集落であることは確実視される。^{註8}

古代集落はおそらく短期間で廃絶し、再び集落地として活用されるのは鎌倉時代、13世紀以降のようである。貿易陶磁や石鍋の存在は、当地に比較的裕福な農民層が居住したことを物語っているものの、集落構造を復元するには情報が不足している。私見であるが、弥生時代の遺構とされた溝1は、出土遺物から所属時期が否定されるばかりでなく、階段耕作地の区画に平行して直線的に設けられていることから、近世以降に灌漑用施設として設けられた可能性が高いと考えている。

発掘調査から半世紀以上が経過し、残された断片的な資料から調査の再評価を行った。遺物の所属遺構が不安定であることから推論に頼らざるを得ない状況であったが、小野氏および調査団による遺跡の評価とは大きく異なる結果を得ることとなった。当地ばかりでなく、吉田遺跡全体の性格を捉える上で重要な成果と言える。

本稿をもって、調査団設立前の昭和41年(1966)に小野氏と学生達(文化会考古学部および地理学

談話会)により実施された吉田遺跡の発掘調査に関しては、報告を終えることになる(第Ⅰ地区A区:豆谷1993a、田畑2016 第Ⅰ地区B区:豆谷1993b、田畑2017a 第Ⅱ地区:横山2007)。調査団の実施した発掘調査に関しては、既報告のものもあるが(第Ⅰ地区D区:豆谷1995 第Ⅰ地区E区:豆谷1994)、特に第Ⅲ地区(構内グラウンド周辺の沖積低地)の出土遺物量が膨大であることから、整理作業の目途が立たない状況にある。これらの資料に対しては、今後機会を見つけて報告を行いたい。

本稿を成すに当たり、遺物整理と遺物実測で乃美友香と水久保祥子の協力を得た。また、農学部附属農場に関する施設し関し、農学部附属農場技術専門員の長砂光治氏に様々な情報をいただいた。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。

最後に、吉田遺跡第Ⅳ地区の調査成果を取りまとめていた最中の平成31年4月6日に、当調査を担当し、当館の創設にも尽力された小野忠熙氏が他界された。氏は、本学在職中に吉田遺跡ばかりでなく、島田川流域遺跡群をはじめ山口県内の多くの遺跡調査において陣頭指揮を執られ、当県の考古学研究において大きな足跡を残された。心よりご冥福をお祈りしたい。

【註】

- 1) 吉田遺跡第Ⅳ地区の遺物台帳NO. 32「吉田遺跡第Ⅳトレンチ包含層中1966.7.18」は吉田遺跡第Ⅰ地区A区の第Ⅳトレンチ出土品と見られる。NO. 33の「吉田第一Ⅳ家畜病院横S42.5.25」は吉田遺跡第Ⅱ地区(現動物医療センター周域)での採取品であろう。NO. 1と2の「1964」は誤記、NO. 3の「1966.7.10吉田遺跡第Ⅳ遺跡第Ⅱトレンチ」は日付の誤記もしくは日付が正しければ地区名(第Ⅰ地区)の誤記と思われる。
- 2) 第Ⅰ地区B区の調査については、出土遺物へ注記された日付から、実際は11月に実施されたとの指摘がなされている(田畑2017a)。
- 3) 平板測量図には縮尺が記入されていなかったことから、遺構平面図に描かれたトレンチ長から縮尺を復元した。
- 4) 残された写真を見る限り、トレンチ間の畦はまもなく取り外されたようである。
- 5) 当発掘調査時の写真を見ると、附属農場本館(昭和42年竣工)はすでに建設中であり(写真205)、本館の北に位置する収納舎(昭和42年竣工)は本館が完成した状況で建設中である(写真210)。同時期に計画された3棟の建物でなぜ牛舎のみが発掘調査対象となったのかは不明である。
- 6) 筆者の調査区位置の推定(図80)が正しければ、第5号竪穴住居跡は後に建設されたサイロにより破壊された可能性が高く、第4号竪穴住居跡も牛舎の拡充や牛の活動により遺存していない可能性が高い。
- 7) 少数ではあるが古墳時代後期の須恵器が出土していることに関しては、現在でも調査地の西方に横穴墓が遺存している(図80)ことから、周域に展開していた古墳に由来する可能性も考えられる。
- 8) 当地の南西約275m地点で確認されている土壙群(河村1992)は、ほぼ一時間隔で並んでいることから7世紀後半から8世紀にかけての大型掘立柱建物跡である可能性が高く、その西方約100m、第2学生食堂敷地にて確認された8～10世紀に所属する溝状遺構や掘立柱建物群(豆谷1994、田畑2004b)も官衙に関連する施設である可能性が高い。

【文献】

- 小野忠熙(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団, 山口
- 河村吉行ほか(1985)「吉田構内学生会館新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』, 山口
- 河村吉行(1992)「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』, 山口

- 田畑直彦(2004a)「農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 田畑直彦(2004b)「平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 田畑直彦(2016)「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の未報告図面について」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XXI』, 山口
- 田畑直彦(2017a)「吉田遺跡第Ⅰ地区B区の未報告図面について」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XX』, 山口
- 田畑直彦(2017b)「吉田構内総合研究棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XX』, 山口
- 豆谷和之(1993a)「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』, 山口
- 豆谷和之(1993b)「吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』, 山口
- 豆谷和之(1994)「吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』, 山口
- 豆谷和之(1995)「吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』, 山口
- 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口
- 横山成己(2020)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事(プレハブ撤去)に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成27年度—』, 山口